

Teacher Talk に着目した小学校英語指導

永倉 由里

概要：本稿は、筆者が担当する小学校英語指導に関する授業の改善を目的とし、授業法と教材案を提案するものである。該当科目は一昨年度より担当しているが、小学校英語の変遷や学生たちの実情などから、他の教科とは異なる種々の問題がある。ここでは、「小学校教員養成外国語（英語）コア・カリキュラム」においても推奨されている「児童役としての言語活動を体験しながら知識・技能を高める」手法の一つとして、**Teacher Talk** を取り上げ、その特徴と有効性について議論し、具体的な指導プランを示す。これは、学生の実情と情意にも配慮した提案であり、英語力と指導力を高めるための「より効率の良い学習法」を体験してもらうことで、その後も自律的に学び、研修等を続ける姿勢につながるものと期待している。

キーワード：小学校英語指導，**Teacher Talk**，第二言語習得，授業改善，教材

Elementary School English Teaching Methods Focused on Teacher Talk

1. はじめに

本研究は、2019年度からの新学習指導要領の本格実施に向け、すべての小学校教員養成課程での適用が想定されている「外国語（英語）コア・カリキュラム」の「外国語に関する専門的事項（本学では英語Ⅰ・Ⅱ）」において、推奨されている指導法である「言語活動を体験しながら」授業実践に必要な英語力を身に付けるための指導法の一つとして、特に**Teacher Talk** を取り上げ、その特徴と有効性ならびに具体例をあげ、今後の指導に活かすことを目的とする。

次章では、**Teacher Talk** の役割と特徴を確認し（2.1）、教育改革の進捗状況（2.2）、受講学生の実情（2.3）、第二言語習得に適した知識と技能の学び方（2.4）の面から**Teacher Talk** に力点を置く理由を述べる。

続いて、該当授業を取り巻くこうした諸条件から、より具体的かつ効率の良い授業展開が求められることに触れ、最後に、小学校英語教育における**Teacher Talk** の使用場面を整理し、指導の具体例をあげる。これらは、現行の「小学校英語指導Ⅰ・Ⅱ」においても直ちに活用され得るものであり、授業改善につながる。

2. なぜ Teacher Talk か

2.1. Teacher Talk の役割と特徴

Teacher Talk は、文字通り「教師の発話」で、日本語での発話を含むこともあるが、ここでは、英語でのアウトプットであり、聞き手にとってはインプットとして提供される Teacher Talk を指す。

聞く力を育てるには、毎時間シャワーのように、日本語を交えず多量のインプットが提供されるのがよいとされる。当然、全てが分かるわけではないが、むしろその分からなさを許容し、文脈の中に理解の手がかりを探しながら、聞くことが重要である。

従って、英語学習の場では、分からない言語材料が含まれていても、前後の関係から、それらの意味も全体の意味も大体分かるようなインプット、すなわち Krashen (1985) が「 $i+1$ 」（現在のレベルよりほんのわずか上のレベル）と呼ぶ「理解可能なインプット」を大量にかつ継続的に提供されるのが望ましい。

そこでは、教師が学習者の生活、興味・関心に関連のある事柄を伝えようとし、それに対し、学習者は英語や日本語、あるいは表情やジェスチャーなどで何らかの反応を示す。つまり、本物のやり取り（**real communication**）が成立している。

目標言語である英語での **real communication** というと、（ア）英語母語話者との英語でのやり取り、（イ）日本語以外の母語話者と英語でのやり取り、（ウ）母語を同じくする日本人と英語で行うやり取りの3種類が考えられる。当然のことながら、（ア）または（イ）の場合は、日本語の使用に甘んじることなく、第二言語習得の道筋に合致した学びが展開する。しかし、現状では、（ア）または（イ）の環境、すなわち ALT と学べる機会は限られている。

そこで、求められるのが、担任である日本人教師自らが授業中に英語を多用し、状況に応じて様々な言語表現を用いてみせる Teacher Talk である。学級担任は、児童にとってインプットとなる Teacher Talk を発し、ALT がいる時には、児童に対し、英語を使ってなんとか意思疎通を成立させようとする姿を示すモデルとしての役割も果たすことになる。

コミュニケーションの重要な要素である「笑顔で」「目を見て」「はっきりした声で」「相手の言ったことに反応しながら」「ジェスチャーを駆使しながら」英語を話そうとする姿を見せることで、「間違えてもいいから英語を使おうとすることが大切だ」という雰囲気を作ることができる。その際には、以下の点への配慮が必要となる。

①短く簡潔である。

②繰り返し、スピード調整、言い換え、理解の確認、ジェスチャーなどのやり取りを助ける方略（**communicative strategies**）を多用する。

③児童の発話を、繰り返し、英語への置き換え、聞き返しなどを用いて、クラス全体で共有する。

④児童たちの“モデル”として、積極的に英語でやり取りを図ろうとする態度を示す。

新学習指導要領では、4技能の一つ「話すこと」を「やり取り」と「発表」に分け、5領域としたのは、**real communication** を、双方向でキャッチボールのように展開する「やり取り」と全体に向けモノログ形式で行う「発表」とに分け、それぞれの目標に適した指導の必要性を強調するためである。

どちらにおいても、**real communication** の成立を念頭に置いており、そのため、児童にとって「身近で簡単なこと」について、「自分が伝えたい内容」を持たせ、それを伝えるために必要な表現を練習し、実際に「やり取り」や「発表」を行ってみて、自分が伝えたいことが伝わる喜びを享受することを目指している。

6年生に対しては、身近な話題について児童同士がやり取りをする **Small Talk** が目標として位置づけられており、文部科学省は既に **YouTube** に **Small Talk** のサンプルをアップし、利用を促している。

Teacher Talk によって、発せられた指示や説明を聞いて、児童は行動することを求められる。同時に、学級担任と児童たちとの関係を良好に保ち、児童の動機づけを促す働きもある。ここで、小学校における **Teacher Talk** の使用場面を整理しておく。

①あいさつとそれに続く季節にちなんだ話題や前時の振り返り、本時へのオーラル・イントロダクションなど

②活動（発声、模倣、歌・チャンツ、ゲーム、クイズ、インタビュー等）の指示や説明

③児童に行わせたい活動（やり取り、発表、**Small Talk** 等）のデモンストレーション

④ALT とやり取り（児童のモデルとして、①②③において英語を使用する姿を見せる。）

具体的には以下のような場面での使用が考えられる（表1参照）。

表1 **Teacher Talk** の使用される場面と具体例

場面	具体例
季節にちなんだ話題	4月（お花見，入学），5月（ゴールデン・ウィーク，遠足），6月（梅雨，プール開き），7月（七夕，夏休み），10月（ハロウィーン），11月（紅葉，食欲／スポーツ／読書），12月（クリスマス），1月（お正月）など
前時の振り返り	前時に学んだ言語材料に着目させる場合が多いが，無味乾燥な復唱などの復習ではなく，児童の生活や興味と重なるものが良い
本時へのオーラル・イントロダクション	児童の生活に関連があり，興味・関心を引くストーリー性のある導入が好ましい。場合によっては，異文化や他教科との関連を取り上げることもある
活動の指示・説明	ポスターやカードを使った活動，歌・チャンツを使った活動，絵本を使った活動，各種ゲーム（ Keyword Game , Missing Game , Who am I , Bingo Game 他）， Interview , Small Talk , Role Play , Presentation など
行わせたい活動のデモンストレーション	本時へのオーラル・イントロダクションや活動の指示・説明の中に盛り込まれることが多い。

ALT と共に行う Teacher Talk	ALT が提供するインプットの理解を助ける「聞き返し」「質問」等のいわゆる communicative strategies を使用する姿をモデルとして示す。ALT との打ち合わせが必要な場合もある。
---------------------------	---

2.2. 教育改革の進捗状況

該当科目においては、良質なインプットとなり得る **Teacher Talk** ができるように指導しなければならないが、一筋縄ではいかない諸々の事情がある。まず、この先数年間の改革の実施スケジュールを本学学生の事情と重ねて整理する（表 2 参照）。

表 2 小学校外国語教育の早期化・教科化の実施スケジュール

	平成 29 年度	平成 30 年度	平成 31 年度	平成 32 年度	平成 33 年度
早期化・教科化		移行措置（先行実施）		全面实施	
	3, 4 年生用教材・指導案例・デジタル教材の共有 5, 6 年生用教材・指導案例・デジタル教材の共有	3, 4 年生教材・指導案例・デジタル教材（総合学習の時間から 15 時間） 5, 6 年生教材・指導案例・デジタル教材（35 時間＋総合学習の時間から 15 時間）		3, 4 年生新教材（35 時間） 5, 6 年生検定教科書（70 時間）	
平成 28 年度入学生動向	2 年生「小学校英語指導 I」を履修	3 年生「小学校英語指導 II」を履修	4 年生	新任教員？	採用 2 年目？
平成 29 年度入学生動向	1 年生（小学校での外国語活動なし）	2 年生「小学校英語指導 I」を履修	3 年生「小学校英語指導 II」を履修	4 年生	新任教員？
平成 30 年度入学生動向		1 年生（小 6 で外国語活動あり）	2 年生「小学校英語指導 I」を履修	3 年生「小学校英語指導 II」を履修	4 年生
平成 31 年度入学生動向（新カリキュラム）			1 年生（小 5, 6 で外国語活動あり）	2 年生「英語 I」「英語科教育法」を履修	3 年生
平成 32 年度入学生動向（新カリキュラム）				1 年生（小 5, 6 で外国語活動あり）	2 年生「英語 I」「英語科教育法」を履修
課程認定	準備	新課程認定	新課程実施		

平成 28 年度入学の学生は、2 年次に「小学校英語指導 I」を、3 年次に「小学校英語指導 II」を履修する。年度当初の履修ガイダンスで履修を勧めたため、今年度（平成 29 年度）は多くが履修している。彼らが小学校実習に赴く平成 30 年度には、移行措置（先行実施）の 1 年目で、3, 4 年生は、総合学習の時間からの 15 時間分を外国語活動に当て、5, 6 年生は、35 時間＋15 時間で計 50 時間の中で、文部科学省から提供される新教材を使

って、「教科」としての授業も試行されていることになる。

平成 29 年度、平成 30 年度入学の学生も同様であるが、彼らが教壇に立つ時には、新学習指導要領のもと、早期化（3,4 年生，週 1 時間）・教科化（5,6 年生，週 2 時間）が全面实施となっている（平成 30 年度入学生は小学校実習時も）。

平成 31 年度入学生は、2 年次に必修となった「英語 I（1 単位，外国語に関する専門的事項）」と「英語科教育法（2 単位，外国語の指導法）」を履修する。このような変革の真っ只中にあることを学生たちにも認識させ、できる限りの策を講じなければならない。

2.3. 受講学生の実情

ここでは、紙幅の関係で多くを述べないが、現在在学中の学生は、小学校時代に小学校外国語活動を体験している者はごく少数に限られ、小学校外国語活動についてのイメージを描きにくい。しかも、彼らの中学・高等学校での英語授業では、語彙・文法の定着を求められ、その後使用練習を行うという順序で学んでいる。さらに、練習問題等の教材、テスト、入試などの影響もあり、暗記や内容理解のための学習方略には慣れているが、「話す・聞く」に有効な方略には馴染みのない者が多い。つまり、第二言語習得に適した言語の使用場面における習得とそこで用いられるべき学習方略の使用の経験が極めて乏しく、それゆえにそれらの有効性を実感している者も少ない。

2.4. 第二言語習得に適した知識と技能の学び方

学生たちは、概して、小学校英語指導に必要で、彼らが近い将来実践しなければならない「言葉の学び方」すなわち「第二言語習得に適した学習方略」には馴染みが薄い。そのため、指導にはそれなりの配慮が必要となる。

まずは、授業を担当する筆者の **Teacher Talk** を聞くことにより、第二言語習得に欠かれないインプットがもたらす「脳の働き方」を体験し、その感触を意識させたい。併せて、理論的説明も加え、こうした「言葉の学び方」の有効性を伝える。次に、学生同士のペア・ワーク、グループ・ワークの中で教師役として **Teacher Talk** を行うことでアウトプットの練習をする。

アウトプットは、インプットに比べ、より多くの知的努力（**mental effort**）を学習者に要求し、より深い言語処理をさせる。聞く・読むなどの理解行動では、理解の不十分さをごまかすことも可能だが、話す・書くなどの産出行動では、ごまかしは利かず、自らの中間言語を精一杯使って、その限界を認識することができる。そうした限界の認識が、その後、その不足を埋めるようなインプットを得た際に、そのインプットを効果的に摂取する効果があるとされる（Swain, 1995）。

学生たちに自身の立場で自由に話すアウトプットの機会を多く与えることは、これまで筆者が実践してきた「話せるようになること」を目的とした実践研究（永倉, 2006, 2007, 2008, 2013）においても、「[即興的な]やり取り」の力を伸ばす効果があり、対象学生

の動機づけにもつながっていることが確認されている。また、これらの方略は、場数を踏めば踏むほど、自然に使えるようになり、総じて英語力の向上につながるため、積極的に取り入れたい。

3. 求められるより具体的かつ効率性の高い授業

前述のような状況の中で、受講学生の実情に配慮し、急激な変化に対応しなければならないにもかかわらず、現在の開講科目は2科目であり、授業時間は合計30コマである。その中で、「コア・カリキュラム」が求める事柄を網羅するのは容易なことではない。できるだけ具体的かつ効率的に学んでもらうことが必要である。

3.1. 自律性を高める

前述の教育改革の動向と学生たちの置かれた状況を踏まえ、それらを冷静に受け止め英語力を高めていくには、自らを学習にいざなう自己管理能力などのメタ認知能力が欠かせないことを強調する。

たとえば、インプットには量と継続が欠かせないが、そればかりに時間を割くこともできない。そこで、リスニング力の向上に効果があるとされる方略を紹介し、毎時間行う「帯活動」のひとつとして、独自の発音指導を行い、「言えれば聞こえる」「言えなければ聞こえない」「言い分けられれば聞き分けられる」「言い分けられなければ聞き分けられない」ことを実感させ、あとは、適した教材やサイトを紹介し、授業外での各自の努力に頼らざるを得ないことを伝える。

3.2. 明示的説明の有効活用

児童に対しては、あくまで言語使用を通じた学びの機会を提供するわけだが、学生たちに同じプロセスをたどってもらっただけの余裕はない。学生たちの持つ十分な知力と理解力に期待し、理論的な情報を明示することで指導の効率をあげる。

たとえば、綴りと音の関係（フォニックス）や音の連結などの音法、文構造・文法などについては、明示的な説明があれば、それらを理解し納得した上で練習をすることができる。毎時間行う「帯活動」も、背景にある理論を踏まえていることで動機づけにもつながり、積極的な練習態度につながることを期待される。

3.3. 具体的な場面の提示

良い指導を展開するには、小学校における具体的な指導場면을示し、その場面に当てはまる知識・技能に絞って、実践しながらに練習し、発表し合い、振り返ることが重要となる。紹介したい歌・チャンツ、ゲーム、クイズ、様々な英語活動、Classroom English、実践映像、指導案例、絵本などは、数知れず、ついあれもこれもと欲張ってしまいがちだ

が、闇雲に多くの歌を紹介したり、よく目にする **Classroom English** の一覧表を配布し、暗記を促すのは賢いやり方ではない。

典型的な 2~3 の単元に絞り、単元構成、各時の指導案を具体的に示し、授業のイメージが描けるよう映像資料を視聴させる。言語活動を体験する場合は、その前後に、単元計画のどの場面で行われる活動であり、領域別目標の内のいずれを目指したものであるかを意識させる。同時に、その活動が第二言語習得に適したものであり、児童のどのような姿を持って「~できるようになった」と評価するのかという一連の流れを意識させなければならない。特に、言語使用を通じた学びというのは、英語を発しさえすればよいのではなく、言語活動の真正性（リアルさの度合い）への配慮が重要であることを強調したい。

3.4. アウトプットの機会提供

アウトプットの力を高めるには、量と継続が重要ではある。語学力の伸長には中長期の留学が良いとされるのは、目的言語が使用されている環境でインプットの質と量を確保できるだけでなく、自身のアウトプットが相手に通じるのか否かを体験できるからである。ENL 環境、ESL 環境であっても一定の効果を得るのには、数ヶ月以上はかかると言われている。では、EFL 環境である教室においてはどのような手法が良いだろう。準備もさせず、闇雲に「なんとか英語で言ってみる」ように促すだけではあまりに無謀である。授業中の活動は日本人同士なので、語彙・文構造・文法の正確さや表現と場面との適合性などについての判断は難しいからである。

そこで、予習としてアウトプットの内容を用意し練習（リハーサル）をしてくるよう指示し、授業中には、児童役の学生に対する **Teacher Talk** として英語を話す機会を設けることにする。しかし、これまでの授業実践においても、これがなかなかうまく機能しないことを経験している。いわゆる“真面目な”学生は、それまでの学習経験から提供した例文を「暗記」しようとしたり、準備してきたアウトプット用の英文を「読んで」しまったりするのである。十分な練習の結果、例文を見ないで言えたとしても、表情やジェスチャーは乏しく声は小さい傾向にある。一方、ぶっつけ本番志向の学生は、声は大きく元気もあるが、安易に日本語を使用する傾向があり、文構成・文法への配慮が乏しいことが多い。

これまでの実践研究の結果を踏まえ、このような傾向を学生とも共有し、ある程度の準備が必要であることを認識させ、授業中に行うこのような英語の使用練習がより有意義なものになるよう、こちらの狙いを伝えながら授業を展開させたい。

次章では、これらの点に配慮した指導プランを示す。

4. **Teacher Talk** を含む学習指導案を用いた指導

児童の「言葉の学び方」に配慮する場合と同様に、学生が **Teacher Talk** の力を養う際にも、具体的な使用場面を設定し、真正性（リアルさ）を保ちながらの指導が必要である。

そこで、各場面で使用される **Teacher Talk** の例を具体的に示した学習指導案を提示し、それを活用した授業実践を行う。

資料 1 は、『Hi, friends 1』Lesson 4 について作成した単元計画ならびに各時の指導案の概要（目標、教師・児童の活動内容など）である。指導の際には、常に全体の流れをイメージさせ、**Teacher Talk** の使用場面とその内容などを意識させる。特にターゲットとなる言語材料に慣れ親しむ活動から真正性（リアルさ）の高い「やり取り」へと段階的に指導することに注視させる。

日常的に頻繁に使われる挨拶などの定形表現は、平易なものばかりなので、学生もさほどの負担は感じないと予想されるため、毎時間の「帯活動」の中のペア・ワークとして、表情・ジェスチャーを交えた実演をし合うことで済みます。

一方、授業開始時の **Oral Introduction** や言語活動の説明と進行などの、準備が必要で、繰り返し、スピード調整、言い換え、理解の確認、ジェスチャーなどのやり取りを助ける方略（**communicative strategies**）を多用しなければならないものは、リハーサルを行ってくることを求め、数人以上のグループの前で行わせ、相互に評価させる。

さらに、短時間の模擬授業（マイクロ・ティーチング）の際には、**Teacher Talk** の使用を重点目標とし、提出を求める指導案にも記載させ、求められる **Teacher Talk** の要素が満たされているかを評価に反映させる。

そして、授業を担当する筆者自身も、こうしたことに取り組む学生たちのモデルであることを忘れず、**Teacher Talk** を多用することを心がけ、併せて、指導の意図や理論的背景を明示すること、小学校英語指導において実際に使えるような表現を厳選することで、授業の効率を上げ、学生の動機づけにもつなげたい。

幸い、受講学生は小学校教員を強く志望しているため、授業には前向きに臨んでくれる者が多い。目的に即した学習方略があるということを知り、臆せず試してみることで、それまでより上手な学び方が身につく可能性があることを強調しつつ、授業改善に取り組んでいきたい。

なお、**Teacher Talk** に着目した指導計画案は、他の **Lesson** についても作成し、該当授業の教材として活用することになっている。

5. おわりに

新学習指導要領の施行を控え、他の教科の指導法に関わる授業を担当しておられる先生方も、指導の変更・改善を考えていらっしゃると思う。思考力・判断力・表現力を求める中で、アクティブ・ラーニングが推奨されていることから、教員養成に携わる教員同士の協力・協働のあり方を含め、授業改善に取り組んでいきたい。

参考文献

Krashen, S. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Torrance, CA: Laredo Publishing Company, Inc.

永倉由里 (2006). 「言語学習ストラテジー・トレーニングが学習効率, 動機づけに与える影響」『中部地区英語教育学会紀要』第 36 号, 39-46.

永倉由里 (2007). 「第二言語習得研究を活かした日本人のためのストラテジー・トレーニングの方向性」『中部地区英語教育学会紀要』第 37 号, 151-158

永倉由里 (2008). 「第二言語習得研究を活かした日本人のためのストラテジー・トレーニング」『中部地区英語教育学会紀要』第 38 号, 429-436

永倉由里 (2013). 「『Learning Journal』から読み取る英語授業が学習者の学習観に与える影響」『中部地区英語教育学会紀要』第 42 号, 235-242.

Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook & Seidlhofer, B. (Eds.), Principle and Practice in Applied Linguistics (pp.125-144). Cambridge: Cambridge University Press.

資料 1 『Hi, friends 1』Lesson 4 I like apples. 単元計画と学習指導案

単元目標	<ul style="list-style-type: none"> 好きなものや嫌いなものについて, 積極的に伝えようとする。 好きなものや嫌いなものを表したり尋ねたりする表現に慣れ親しむ。 日本語と英語の音の違いに気づく。
単元評価 規準	<ul style="list-style-type: none"> 好きなものや嫌いなものについて, 積極的に尋ねたり答えたりしている。 好きなものや嫌いなものを言ったり尋ねたりしている。 日本語と英語の音の違いに気づいている。
言語表現	I like ~. I don't like ~. Do you like~? Yes, I do. / No, I don't. strawberry, cherry, peach, grape, kiwi fruit, lemon, banana, pineapple, orange, melon, ice cream, milk, juice, baseball, soccer, swimming, basketball, bird, rabbit, dog, cat, spider など

単元計画(全 5 時間)

	第 1 時	第 2 時	第 3 時	第 4 時	第 5 時
導入	Oral Introduction 「冷蔵庫の中」	Oral Introduction 「先生の好きなもの・嫌いなものを知ろう」	Oral Introduction 「リュックサックの中には？」		
チャンツ	Let's Chant 1 p.16	Let's Chant 1 p.16	Let's Chant 2 p.17	Let's Chant 2 p.17	Let's Chant 2 p.17
語彙	Let's Play p.14,15 おはじきゲーム 「キーワード・ゲーム」	「ジェスチャー・ゲーム」 「キーワード・ゲーム」			
パターン	「シンクロ・カルタ」 I like ~.	Let's Listen 1 p.16 「誰が何を好き？」	「キーワード・ゲーム」 Do you like~?	「ステレオゲーム」 ⊕⊕⊕⊕⊕ Do you like~? Yes, I do. / No, I don't.	
	複数形 ~s への気づき 「どこが違う？」	「メモリー・ゲーム」	「Q&A カードゲーム」		
やり取り			Let's Listen 2 p.17 「○×を書き入れよう」	Activity p.17 「インタビュー・ゲーム」 Do you like~? Yes, I do. / No, I don't.	Activity ワークシートを使って「インタビュー・ゲーム」 Do you like~? Yes, I do. / No, I don't.
				「なりきり Who am I」	「なりきり Who am I (2)」全体の前で

第 1 時の学習指導案

目標	日本語と英語の音の違いに気づき, 好きなものや嫌いなものを表す表現を知る。
----	---------------------------------------

準備	教師用絵カード(果物, 食べ物, 動物, スポーツ), デジタル教材, おはじき, (振り向きカード)
----	---

児童の活動	教師の活動
Greeting	省略
<p>Oral Introduction</p> <p>「冷蔵庫の中」</p> <p>冷蔵庫の中にあるものを推測しながら, 果物や飲み物などの言い方を知る。</p>	<p>T: Hello. How are you?</p> <p>S1: I'm good.</p> <p>S2: I'm very hungry.</p> <p>T: What do you want to eat? Bananas? Chocolate?</p> <p>Now, we are in the kitchen. (冷蔵庫の扉に見立てた白い紙 2 枚を指して)</p> <p>What's this?</p> <p>S3: 冷蔵庫</p> <p>T: Yes, it's a fridge. Let's open it. (白い紙の下に食べ物カードを隠してある)</p> <p>What's in the fridge?</p> <p>S4: Milk.</p> <p>T: Yes! Milk is in the fridge.</p> <p>S5: アイス</p> <p>T: Yes! Ice cream is in the fridge.</p> <p>S6: プリン?</p> <p>T: Pudding? Yes. It's in the fridge.</p> <p>S7: ヨーグルト!</p> <p>T: Yogurt? No. It's not in the fridge.</p> <p>など</p>
<p>Let's Chant 1 p.16</p> <p>音声を聞き, 絵を見て言う。</p>	<p>T: Let's chant together. デジタル教材</p>
<p>Let's Play p.14, 15</p> <p>「おはじきゲーム」</p> <p>音声を聞き, 繰り返し, おはじきの置いてある語ならおはじきを取る。</p>	<p>T: Let's try/enjoy the <i>ohajiki</i> game. デジタル教材</p> <p>Listen to me (the CD) carefully and repeat after me.</p> <p>When you hear the word with your <i>ohajiki</i> on, take the <i>ohajiki</i>.</p> <p>If you take the five <i>ohajikis</i>, you are a winner.</p>
<p>「キーワード・ゲーム」</p> <p>教師の言う語句や I like ~ を聞き, keyword なら消しゴムを取る。</p>	<p>T: Let's try/enjoy the keyword game.</p> <p>Make pairs.</p> <p>Put an eraser between you and your partner.</p> <p>Listen to me carefully [and repeat after me].</p> <p>When you hear the keyword, take the eraser as soon as possible.</p> <p>The keyword is pineapple.</p> <p>Are you ready?</p>
<p>「シンクロ・カルタ」p.14, 15</p> <p>教師の言う語句や I like ~ を聞き, 同時に絵を指差す。</p>	<p>T: Let's try/enjoy the synchronized pointing game (シンクロ・カルタ).</p> <p>Make pairs.</p> <p>Open your textbooks to page 14 & 15.</p> <p>Put one of them between you and your partner.</p> <p>Listen to me carefully, and point the picture repeating after me.</p> <p>Are you ready?</p>
<p>複数形~s への気づき</p> <p>「どこが違う？」</p> <p>1つと2つ以上の表現の違いを知る。</p>	<p>T: Listen to me carefully.</p> <p>I like apples. I like apples.</p> <p>I like milk. I like milk.</p> <p>What's the difference? など</p>
<p>・振り向きカードに記入する。</p> <p>・挨拶をする。</p>	<p>T: Take out your reflection sheet.</p> <p>How was today's class?</p> <p>I think you did a good job.</p> <p>Thank you. Good-bye.</p>

(紙幅の関係で以下省略)